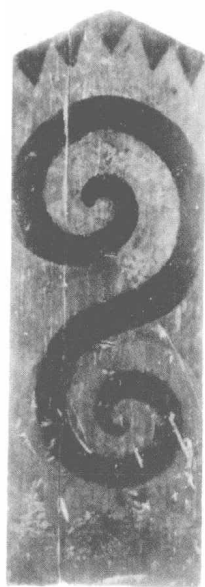


司馬遼太郎

翔ぶが如く
一

司馬遼太郎 翔ぶが如く 一

文藝春秋





翔ぶが如く一

昭和五十年十二月三十日 第一刷
昭和五十一年二月十五日 第六刷

著者 司馬遼太郎 しばりょうたろう

発行者

榎原雅春

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(東京)二六五―二二二番
郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

*万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

はじめに

——いっど、吉野に、行たっおじゃはんか。

という言葉であつたか、鹿児島市内の知人に、市内から東北へすこし離れた吉野郷という高原に行くことをすすめられた。

吉野郷は桐野利秋という、この小説の最後まで登場する汗くさい男のうまれ在所である。そのころ私は三十前で桐野について知識も関心もなく、ただ吉野郷の錦江湾^{きんかうわん}方角に向つて突き出た大崎ノ鼻という草原に立てば、潮風と霧島おろしが入りまじつて体が吹っ飛ばされそうだということだけをきいて出かけたのである。

途中、小さな流れのそばで弁当を食つたとき、目の前を赤い鼻緒の幼女の下駄^{げた}が流れて行つたのをおぼえている。

いま、そのことが、西郷隆盛の若いころの逸話とかさなつて想い^{おも}合^あわされる。この県の川越政則氏の書かれた「南日本風土記」にもそのことが出ている。西郷がまだ部屋住みの若者^{わか}のころのことである。台風と出水があつて、家中が騒いでいたとき、西郷がふとみると、水が垣根までできていた。その垣根の側^{はた}を鼻緒の赤い下駄が流れてゆく。オヤと西郷はひとりおどけて、

「下駄さア、こんう風ぜえ、どこずい、おじゃすか」

と、赤い鼻緒に話しかけたという。こういう優しさとユーモアは当時の薩摩人^{さつまじん}に大なり小なり共通していたものがあり、この機微がわからなければ、うかつに薩摩のことは書けないと私はいまでも思い、はたしてこの小説がそういう人間現象のどういう内部まで入ってゆけるかということ、すでに書きはじめてしまっているいまでも思い悩んでいる。

私に吉野郷ゆきをすすめてくれた知人も、四十がらみの大入道のくせに、高原への登り坂のどのあたりの道端^{みちばた}に気をつけなさいよ、露草がきれいにならんで紫の小さな花をつけていますから、というようにことを言い添えた。この露草の好きな知人は、同時に、

「チエーイ」

と、ひき裂くような掛け声で立木を打つ示現流^{じげんりゅう}の名人という評判があった。

吉野郷への登り道には樟^{くすのき}が多く、皮革質の葉のおびただしいつやめきが陽^ひと風のなかで騒いでいる。この土地ほどこの照葉樹の似合う風土はなさそうであった。

大崎ノ鼻に立ってみると、なるほど風が強い。私の知人は風のことだけを言ったが、かれがかんじんなことを言わなかったことに気づいた。元来かんじんなことはなるべく口中に含んで言わないというこの土地の古いしきたりを私の知人も身につけていた。

山風や潮風よりも、じつは眺望^{ちやうぼう}であった。この大崎ノ鼻に立つと、濃い群青^{ぐんじやう}の錦江湾に浮かぶ桜島の山容とその色彩が、どの名陶をも見すばらしくさせてしまうほどの凄味^{すこみ}をもって迫ってくる。

それだけではなかった。

太陽がちょうど桜島の右肩の上にあった。

そのために桜島をとりまく錦江湾のブルーは濃淡をもつて縞模様しまようをなしている。

太陽の真下にあたる右手の海は波がきらきらと跳ねあがって見えるばかりに鮮あざやかであり、中央の海は逆光のために黒く、海底に怪魚の蠕わだかまるのを想像させるほどに古代的な不気味さをたたえていた。

しかしながら目を左へ転ずると、まったく異なる青の世界がはるかにひらけていた。海は軽佻けいちょうなほどにあかるく、

「泣こよつか、ひつ翺とべ」

という上代以来の隼人はやとどもの心を、この青が染めあげたかと思われるほどに陽気であった。この大崎ノ鼻からながめると、桜島が中央の主座にすわり、その右手のほうはるかな天に、薩摩半島の先端に位置して薩摩富士といわれる開聞岳かいもんだけがうかんている。

左手には巖々あひあひとしたかすみのむこうに霧島山がそびえ、しかもそれだけではなかった。高千穂の峰が、衣のすそをひく神人のようにかさなっているのである。

ところがこれらがみな活火山であるために、この風景はなお今後変化するかもしれず、できあがってまだ二千年も経っていないのである。

奈良朝あたりではこれらがしきりに大爆発し、ときに海中が湧わいて新島を盛りあげるなど、そのおそろしさに人が住みかねていたらしく、平安初期になってようやく開墾がさかんにな

つて中央の土地制度に組みこまれた。それ以前にはこの国の海岸に住むひとびとは、

「隼人」

といわれていた。歌舞伎の化粧がそうであるように目に赤いクマドリをし、ときに頬に赤い染料をぬり、その行動が敏捷であるためにハヤヒトとよばれた。「魏志」に出てくる倭人を思わせ、げんに薩摩人はすでに戦国のころから自分たちこそ日本人の原型であり、他は日本人に似た連中であるという優越感をもち、江戸期になると島津家はその家柄についての優越感からひそかに徳川將軍家をころんじる気配さえあった。げんにかれらが徳川家を倒して明治維新を成立させたとき、仲間の長州人の場合のような過剰な対徳川家憎悪も持たないかわりに、倒れてゆく徳川家に対し無用の感傷ももたず、どちらかといえば土俵でうちたおした好敵手に対する闘士としての奇妙な愛情を持ったという、ふしぎとしか言いようなない気配を歴史の上に投影した。

しかもかれらは自分のつくった明治国家をも気に入らず、明治十年までいっさい中央の指令をこばんで独立薩摩圏としてありつづけた。

「君たちはえたいが知れない」

この吉野郷の桐野どんの掘立小屋のようだったという生家のあとを訪ねたとき、正直なところそう思った。

目次

パリで
11

東京
28

鍛冶橋
38

情念
85

征韓論
105

小さな国
166

渋谷金王町
190

好転
228

ジャーニー
343

風雨
314

鈴虫
277

装帧 粟屋 充

カバー写真・女方式弥生式土器 部分（水戸・マロン美術館蔵）
鼎写真・隼人の盾（奈良国立文化財研究所蔵）

翔
ぶ
が
如
く
(一)

パ リ で

この男は、薩摩の田舎では、

「正之進」

とよばれていたが、パリでは、*とい、い*ながとローマ字で書いていた。

川路利良である。

日本人としては背が高く、しかも頸^{くび}がながいために、その上に載^のった頭がすこし安定感を欠くくらいがあった。色白で可愛気のある丸顔だったため、最初パリでときどき子供にまちがわれた。このため口ひげをはやした。生来ひげの薄いたちであるため、毛が唇のはしに集まって、それが夕方になると脂染^{あぶらじ}みてくるのでひげのさが垂^たれた。「おまえはシナ人か」

と、女を買うときなどはよくきかれた。かとおもえばスペイン人かと問われることもあり、そういえば当時パリで興行して人気を得たスペインの闘牛士の某と川路の顔だちが似ているという気味はあった。

「何国人だ」

ときかれても、川路はつねにだまっていた。かれは薩摩語と日本の普通語のほか、英語もフランス語も、世界中のあらゆる言語を一語も解しなかったし、たとえ知っていたとしてもこの男はもととおそろしく無口だったから、そういう質問には答えなかったにちがいない。

川路は洋服をきて一八七二年（明治五年）の九月に横浜を出帆し、厳冬といつていい季節にマルセーユに上陸した。

列車がパリに近づくにつれて寒さがひどくなり、（まるで蝦夷地^{えぞち}《北海道》のようだ）

とおもい、ひざに赤い毛布をかけた。そのころ、体をねじりたくなるほどに便意を催した。

（パリまで、あとのくらかかるのか）

と考えてみたが、かれの思考を決定するなんの材料も

なかった。あと一刻（二時間）ほどで着きそうでもあり、しかしながらあと三日もかかるかもしれないという心配もある。

——沼間守一にでもきくか。

と思ったが、しかし業っ腹でもあった。

沼間は旧幕臣出身のなかでは代表的な秀才とされている。かつて幕陸軍に属した。幕府瓦解後、旧幕陸軍をひきいて関東各地に転戦した。ついであるがら沼間はのちに明治期の在野政界を構成した知的政治家ということのほかに、この戊辰戦争の戦場にあつては卓抜した軍隊指揮官であつた。そのころ川路は敵側の官軍ながら、薩摩の足輕隊をひきいてその軍人としての能力はむしろ沼間を凌駕した。が、いまは兩人とも軍人ではない。

沼間は、おなじ客軍のうしろのほうにいて、旧土佐藩出身の河野敏鐵と談笑していた。

客車には縦断する通路がなかったため、もし川路がききにゆこうとすれば木製の座席をいくつも乗りこえてゆかねばならず、この場合そういう過激な運動が下腹にどういう変化と結末をあたえるかは明白であつた。川路は

こらえた。

顔が真っ青になった。

——蝦夷地のようだ。

という川路のフランス風景観はあるいはあたつているであらう。パリの緯度は樺太の南部に相当し、ときに車窓からみると積雪がところどころにこびりつき、白樺の林がみえた。川路は戊辰戦争では会津まで行き、あとは郷党の親玉である西郷隆盛からその才を買われて東京で薩摩軍の兵器奉行をつとめたため函館の五稜郭攻めに参加しなかつた。このため北海道もこの男は知らなかつたのだが、しかし話できいて想像だけはしていた。想像力は乏しいほうではない。

列車はレールの継ぎ目にくると震動する。そのわずかな震動も、川路にはこたえた。かれはニスの剥げた腰掛けの板から、わずかに尻をもちあげていた。が、ついにはそのようなごまかしがきかなくなるほどに川路の便意は急を告げはじめた。川路はからだ中の血液が下へさがる思いがした。

（人間というのはなぜ汚物を排泄しなければならぬのか）

と、川路はなさけなくなった。人間は決して高雅ないきものではない。詩経という君子も竊窬たる淑女も、その排泄という場所からとらえればことごとく悲惨である。ついでながら川路は西郷の示唆で、フランスの警察制度を日本に輸入すべくはるばる極東の無名国からきたのである。警察もあるいは人間社会をその排泄口においてとらえている機構かもしれない、川路はそのことを懸命に考えることによって気をまぎらわせようとした。

が、ついに我慢の極がきた。

かれはたまたま横浜で刊行されていた日本の新聞紙をもっていた。それを床の上に敷いた。

やがて毛布を肩までかぶり、毛布の中でズボンをぬぎ、腰をすこしずつずらせて床の上にしゃがんだ。毛布をかぶっているため、他人の目からは何をしているのかわからない。大いに発した。叫びをあげたいほどの解放感であった。

前の座席には、どこかの田舎教師らしい中年の男が、

その妻女と二人ですわっている。川路の位置から二人の肩から上が見えた。この間、その二人の肩が微動だにしないところをみても、二人は川路の挙動に気づかなかったはずであった。

川路は、ふかしたての饅頭をつつむようにしてそれを新聞紙につつま、わっと窓のそとへなげた。すべてはおわった。

が、終わらなかった。かれがパリについた翌日、新聞にそのことが出てしまったのである。

「パリ近くで列車の窓から大便をほうり投げた者がいる。それが保線夫に命中した。保線夫が怒り、それを警察署へもってゆくと、警察署にアジアの事情に明るき者がおり、これは日本文字なり、投げた者はおそらく日本人なるべし、と証明した」

その新聞を沼間守一がもってきて、そのくだりを指でたいた。国辱と思わないかね、君、と沼間はいった。

「薩摩人はどうも行儀がよくない」

と、旧幕臣でそれも代々の旗本の子である沼間は、川路をばかにしきったような顔でいった。

日本からマルセーユまでの船旅のあいだ、沼間守一と川路利良はほとんど口をきかなかった。

——虫が好かない。

という感じが双方にあった。

理由は性格がちがうというより、むしろ濃厚なある一点で似たものを共有していたからでもあろう。たとえばどちらも現状から跳躍して物事をしたがるたちで、しかもやるにあたつては双方清濁にきびしすぎた。清を採り濁を捨てる場合、濁に対して激烈な打撃をくらわせねば気がすまぬ氣質を双方もっていた。

さらには革命早々のこの時期としては、出身のちがいが大きかった。沼間は数年前までは殿様といわれていた旧幕臣出身であり、一方、川路は革命の勝者の側に立つ薩摩藩出身で、しかも革命の象徴的人物というべき西郷に愛されている人物であった。

しかし沼間からみれば、

「田舎侍」

であるにすぎず、しかも川路は江戸城の殿中の常識で

は侍といえるかどうか。

郷士でさえなかった。家格は足輕より紙一重上で、薩摩与力という、特殊な内容をもつ階級から這い出てきている。

もつとも川路の精神内容は江戸期の侍というより戦国武者であつたらう。かれは薩摩藩だけに存在した示現流という実戦型の剣法の達人であつた。稽古は面籠手をつけずただ木刀をもって立木を打ちに打つ。一ノ太刀で勝ちを決定し、二ノ太刀では敵にやられることを覚悟する。たとえば川路も参加した鳥羽・伏見の戦いで薩人に斬られた幕兵の死骸というのは、頭蓋がこなごなになって悲惨なものであつたことをみても、この流儀の凄さがわかるであらう。

しかも川路は藩官吏の出身ではない。

川路は幕末を戦国に見立てたような、いわば野武士のあがりといつてもよく、かれは蛤御門ノ変の前、京の風雲があやしくなったことを嗅ぎあて、近郷の足輕の子をかきあつめてにわかに一個小隊を編成し、みずからその半私兵というべき連中をひきいて上洛した。